

# 礼儀とコミュニケーション

校長 木村 滋夫

今年もすばらしい「夕涼み会」ありがとうございました。雨には降られましたが、それすらもパワーに替えてしまう在校生、卒業生、保護者の皆様、そして地域の皆様の夕涼み会への熱い思いを今回も感じさせられました。毎回、その形は変化していますが、夕涼み会に寄せる皆様の思いは不変だと感じます。それはまた、あざみ野第一小学校を陰に日向に支えてくださっている力だと教職員一同改めてありがたく思いました。

終わってみれば暑い毎日でした。学校に子どもたちの日焼けした笑顔と明るい声が戻ってきました。長い夏休み、ご家庭でエネルギーの充填を終え、これからの学校生活に力いっぱい取り組んでくれることと思います。

7月のサマー教室では大勢の参加があり、それぞれの教室で異学年の人たちや担任以外の先生方とふれあう時間が持てたことと思います。私は、昨年に引き続いて「囲碁入門教室」を担当しました。今年は25名と昨年の倍近い参加があり、3日間熱心に石を並べていました。世界的には碁を打つ人が増えているそうですが、日本においては昨今様々なゲームが子どもたちの前に現れ、囲碁や将棋人口が激減していることを残念に思います。

囲碁や将棋のように相手があるゲームは、ある意味コミュニケーションの場でもあると思います。昔から囲碁は「手談」とも言われます。打つ石はとりもなおさず、相手への問いかけであり、相手の打つ石はそれへの返事となります。何も言葉を介さなくとも相手と碁を通してコミュニケーションが可能なわけです。碁を打ちながら、へボはへボなりに最大相手の考えていることを読み取ろうとします。パソコン相手のゲームなら厭になればスイッチを切ればいいわけで、そこから逃れることができますが、相手があってはそんな身勝手は許されません。

勝敗が絡むものでは、そこにルールとは違った「礼儀」が重んじられます。今、大相撲が揺れているのはそのあたりに起因しているのではないのでしょうか。勝敗を争うゲームですから結果は勝ちか負けです。でも、それだけではパソコンのソフト相手のような味気ないものになってしまいます。勝負は勝負として、時間を共有した相手への感謝や敬意が生じてくるはずですが。それを言葉を使わずして表現するのが礼儀だと思います。当然、日常生活で人と接していく上で礼儀は大切なコミュニケーション能力だと思うのです。「礼儀は非言語のコミュニケーション」とも言われます。ある人がコミュニケーション能力について次のように言っていました。

- ① 自分は今、これこれこういうことについて、こう感じている。こう考えているという自分の気持ちを把握していること。
- ② 自分の気持ちを相手に伝える技能（話し方、身振り手振り、顔の表情など）をもっていること。さらに、その能力を高めようとしていること。
- ③ 自分は相手の言葉と同時に、言葉を発している相手の気持ちを読もうとすること。

このようなことは、幼児期から人間関係の体験を通して醸成されるもので、学校で知識として教え実践させ身につけさせられるものではありません。しかし、このような体験が十分でない子どもには、容易なことではありませんが、学校でも「それ」を体験させていかなければなりません。

毎日の生活を豊かなものにするために必要不可欠な子どもたちのコミュニケーション能力を高め、これからもお互いがお互いを信頼し合い、明るい笑顔と優しい思いやりの心が溢れるあざみ野第一小学校であり続けるよう教職員一同努力してまいります。皆様のご理解・ご協力をよろしくお願いいたします。